



思考への探求

校内研究だより

令和5年6月26日

No.(1)

学ぶこと・考えることを楽しむ

～全教科で育てる「言葉の力」

思いを伝え受けとめ(個別最適な学び)ともに学ぶ(協働的な学び)子どもの育成～



本校では今年度、「全教科で育てる『言葉の力』」を研究主題としている。「言葉の力」を育てていくために「考える力、感じる力、想像する力、表現する力」という四つの観点を大切にしていく。

そして今年度の研究主題のもと、初めての研究授業が6月26日(月)に実施された。授業者は理科の伊藤勇希教諭。4年1組で「からだのつくりと運動」の授業が行われた。本時はこの単元のまとめとなる8時間目の授業。子ども達はこれまでの学習を生かして、伊藤教諭から配布された3つのヒントをもとに恐竜の骨格を想像していった。この授業内容は、教科書の中では小さく扱われているもので、伊藤教諭が独自に考え広げた教材である。3人ずつのグループに分かれ、提示された骨が手なのか、尾なのか、羽なのか、PCで検索しながら推測し、MetaMojiにまとめていく。友達の「言葉」に耳を傾け、自分の考えを「言葉」にまとめ、1時間の授業の中で多くの「言葉の力」が育っていった。ヒントと検索結果との比較、それを関係づけることによるMetaMojiの作成。子ども達はこれまでの学習を生かして想像力を十分に働かせることができた。その骨格はフタバスズキリュウであることが最終的に発表されると、子ども達からは新しい学びの反応が得られた。

「恐竜の姿について、人々の認識は日々変化しています。もしかすると、将来この中の誰かが恐竜博士となる時代には「フタバスズキリュウ」の復元姿が現在と変わっているかもしれません。」

授業の最後に伊藤教諭が話したその言葉こそが、子ども達の未来へとつながる授業となったように感じた。

そして研究協議会では私立 宝仙学園小学校の吉金佳能教諭をお招きした。まず吉金教諭が評価されたのは、今回の授業者である伊藤教諭の独自の授業。オリジナルの教材である。

まだ教員になって間もない立場であれば、過去の教材を参考に授業を組むところだが、自分で考えるその意欲を大変高く評価されていた。理科の授業の今昔も同じである。仮説からの実験を行っていた昔とは違い、今の理科では「まずはやってみる！」という挑戦が高く評価される。実験からの仮説。まさに今回の伊藤教諭の授業も、自分の考えた授業を「まずはやってみよう！」という挑戦から始まったのである。挑戦すること、意欲的に表現する力、AI時代に生きる子ども達にもその力は求められている。一人一人が「表現したいもの」を持ち、教師は授業の中でその方法を提案する。これが現代において求められる授業スタイルなのである。教師も子どもと共に面白がり、好奇心や挑戦力を大切に探求者であってほしい。吉金教諭のお話は、どの時代の教員にも良き刺激となるお話だった。



子ども達のアウトプットを大切に、収束させない理科教育。教員が子どもと共に探求者となる必要性。子ども達の未来に繋がる学びを進めるために、教師として探求、挑戦していく心を持ち続けていきたい。そんな前向きな想いを吉金教諭と伊藤教諭から受け取ることができた。